

父親も参加する週末共同子育ての試み

——「子供の村」の実践より——

市 川 緑

1. は じ め に

2003年6月に発表された人口動態統計によると、2002年の合計特殊出生率は、史上最低の1.32を記録した。日本の人口は2006年にピークに達した後減少していくと予想されている。このままでは、年金制度の崩壊、労働人口の減少などさまざまな問題が現れることは必至である。

合計特殊出生率が、人口を維持できる水準2.08を割り込んで以来、少子化が社会的な注目を集めるようになった。1994年少子化対策「エンゼルプラン」を出され、1998年には厚生白書「少子社会を考える」が編まれた。政府の、この状態を改善しようとする努力にもかかわらず低出生率に歯止めのかかる様子はない。子どもを産むかどうかは個人的な問題で、政府がとやかく言うことではないからかもしれないが、子供を産み育てることに希望を持ってない社会は改善の余地があると思う。高橋（2003）によれば、1990年ごろまでは、夫婦の持つ子どもの数は減っておらず、少子化は未婚化晩婚化が主な原因であるとされていた。しかしその後は、夫婦の持つ子どもの数自体が減少しているという。子どもが少なくなっているから、産んでくれと言われるから産むわけでは無論ないが、子供を産みたいと思うような社会にするには何を変えればよいのか、真剣に考える必要があるだろう。柏木（2001）の指摘するように、「子どもの価値」が変わってきており、女性の生き方の変化と絡んだ心理的な問題なのである。

また、育児ノイローゼや虐待など子育てを巡る暗い話題が紙面に上らない日がなく、若い世代に「子育ては大変なもの」と認識されていることも由々しき問題である。岩堂（1997）の指摘するように、かつて「育児は親個人の仕事というよりは、地域社会が共に担う仕事」であり、「子どもたちは兄弟姉妹はもちろんのこと、血縁・地縁でつながる老若男女さまざまな人々と接触する中で育っていった」のであるが、今育児は家庭内に押し込められ、もっぱら母親の仕事となっている。それが、母親に育児の負担感や、拘束感をもたらしているのだとすれば、現代社会に見合った新しい「育児の共同化」が必要なのではないだろうか。

今、さまざまな自治体が、子育ての支援活動に取り組んでいる。その多くは、育児相談と学校の空き教室や幼稚園、保育所などを拠点とした親同士も交流できる共同子育ての実践である。NPOや自主的なサークルも各地に作られ、密室の子育てから母親を解放して

いる。しかし、これらの活動はほとんどが平日の昼間行われる、母親向けのものである。母親の親としての自覚を高めたり、育児のノウハウを伝えたりすることも大切であるが、「社会的な問題として認識し、父親の参加のための方策を考える必要がある（佐藤，2002）」と思われる。

なぜなら父親の育児への参加は、パートナーである母親自身と夫婦関係に多大な影響をあたえるからである。すなわち、父親が育児に参加することによって、母親の精神的ストレスが軽減され（尾形，2003）心理的適応感が増し（池田，2000）夫婦関係への満足度が高くなる（菅原，1998）。そして、子どもの精神的健康度も増すと報告されている（菅原，1998）。このように父親の育児参加は大変重要であるにもかかわらず、子育て期は父親が社会的に労働力として酷使される年齢と重なり、「父親も育児に参加を」という掛け声は大きくなっているものの父親を対象とした取り組みはまだわずかというのが現状である（八木，2002）。

このような中で、以下に紹介する「子どもの村」の活動は、1990年という早い時期にはじめられたことと当初より父親の参加が強調されたことにその特徴がある。個人的なものではあるが、ユニークな活動として報告の意義があると考ええる。

2. 「子どもの村」の概要

- ①目的 「子どもの村」は、塾、稽古事、スポーツクラブなど超多忙な生活を強いられている子どもたちに、都会とは違ってゆったりと流れる「時間」、自然豊かな「空間」、そして大勢の「仲間」の3つの「間」の中で過ごしてもらおうと作られた。複数の家族で週末を過ごすという共同子育ての実践の場である。
- ②活動時期 1990年5月より1997年7月までの7年2ヶ月
- ③施設概要 大阪の都心から、車で2時間ほどの農山村の一角に栗林を含む3000m²の敷地、床面積1階70m²、2階50m²の2階建てログ風ハウス（1、2階ともワンフロアー）とみんなで建てた6畳ロフト付のログハウス。
- ④近隣環境 隣の農家まで徒歩約5分、敷地は山麓にあり、目の前には、手入れの行き届いた田畑が広がる。裏山は、標高626メートルで、頂上近くまでテレビアンテナのメンテナンスのための小さなレールが1本ついている。また徒歩5分くらいのところに加古川の支流が流れ、浅いところは深さ20～30センチ、深いところは70～80センチあり、泳ぐこともできる。
- ⑤利用状況 土曜午後から日曜の夕方までの1泊2日が基本。3～5家族、20人前後で利用することが多かった。開村から3年間で利用者は、約50家族、延べ1000人を超えたが、その後は正確な記録がない。食費等は実費、利用料は1家族3000円で光熱費などの維持費とされた。
- ⑥活動 季節の遊び、春は、ツクシ採り、花見、ワラビ狩り、たらの芽さがし、たけのこ掘りなど、初夏にはホタル狩り、夏はもっぱら川遊び、虫取り、秋には栗拾い、紅葉狩り、冬は寒いので、クリスマス会が終わると活動は休止となる。初期には、ログ

ハウス造りや池造り，立ち木を利用したブランコ作り。釣りや山登りはやりたい人がいればいつでも。隣の農家から声がかかれば，野菜やイチゴの収穫。夜は，大人は1階でお酒を飲みながら語り合い，子どもは2階で大騒ぎの後雑魚寝。時には，車で，アマゴの手づかみができるところへ行ったりすることもあった。また，太極拳の指導者を招いて体験教室を開いたり，昆虫学が専門の大学教員に来てもらうこともあった。食事以外は，緩やかなというか，いい加減なスケジュールで活動していた。

3. アンケートの実施

①目的

中心メンバーの子どもたちが中学生となり，クラブ活動などで参加できなくなったことが主な理由で，子どもの村は閉村した。その後7年が過ぎ，彼らは成人し，一番小さかった子どもたちも小学校高学年になっている。大人になった彼らは，かつての体験をどのように捉えているのか知りたくてアンケートを実施した。最も小さかった子どもたちも言語的に答えることのできる年齢になっている。そして，これは意図したことではないが，親たちにとっては，子どもが巣立とうとする時期に子育て期を振り返りさまざまな思い出を語りあうことが，子離れのひとつの良い儀式となったようである。

②方法

A. 対象 「子どもの村」の活動に2回以上参加した家族のうち連絡の取れた17家族75人。うち12家族49人が返送，回収率は，65パーセント。内訳は，父親10人母親12人，男の子14人女の子13人であった。参加当時の年齢は，親は30～40代，子どもは2～14歳であった。

B. 実施時期 2004年1月

C. 手続き アンケート用紙（附表1参照）を郵送，無記名で返送してもらった。回収後，性別，参加回数別に整理。

③結果と考察

A. 「よい体験であったかどうか」

この設問には，親子ともに肯定的な解答ばかりで，「あまり良い体験ではなかった」「まったく良い体験ではなかった」と答えた人はいなかった。そこで，「とてもよい体験だった」「少しよい体験だった」の2グループで，男女差があるかカイ2乗検定をしたが，親，子どもともに5%レベルで有意差は認められなかった（表1表2参照）。良い体験ではなかったと答えた人がいなかったのは，調査対象を2回以上参加した家族としたため，とも考えられるが，（いやなら2回は参加しないだろうから）「とてもよい体験だった」とした人が大半であったことから推測するとやはり，性別，親子にかかわらず大多数にとって良い体験だったと考えてしかるべきであろう。

また，参加回数の多少により3グループに分けて，カイ2乗検定を行った。親の場合は1%レベルで有意で，参加回数が多いほどとてもよい体験だったと感じる割合が

表1 男女別共同子育て体験の印象（親）

	とてもよい 体験だった	少しよい 体験だった
男	7人	2人
女	11人	1人
計	18人	3人

5 %レベルで有意差なし

表2 男女別共同子育て体験の印象（子ども）

	とてもよい 体験だった	少しよい 体験だった
男	7人	6人
女	12人	1人
計	19人	7人

5 %レベルで有意差なし

高いといえる（表3）。子どもの場合は、参加回数の多少による差は認められなかった（表4）。参加するかどうかは、親の希望や都合で決まるからかもしれないし、子どもは、参加回数が少ないうちから存分に楽しんだからかもしれない。

表3 参加回数別共同子育て体験の印象（親）

	とてもよい 体験だった	少しよい 体験だった
3回以下	4人	3人
4～9回	5人	0人
10回以上	9人	0人
計	18人	3人

1 %レベルで有意

表4 参加回数別共同子育て体験の印象（子ども）

	とてもよい 体験だった	少しよい 体験だった
3回以下	6人	4人
4～9回	5人	2人
10回以上	8人	1人
計	19人	7人

5 %レベルで有意差なし

B. 「どういう面が良かったか？」

表5を見ると、「都会にはない自然の中ですごせたこと」と「他の家族と遊んだり話したりしたこと」が良かったと大人の8割、子どもの7割が答えている。ついで、大人の7割、子どもの5割が「他の家族と一緒に食事を作ったり、作業したりしたこと」をあげている。後述するが、自由記述欄でも、生き物や栗拾いなど自然にかかわる記述と、ともに寝食したなど他の家族との交流に関する記述が大半を占めた。豊かな自然を享受できたこととともに、仲間との共同作業や語らいが大きなインパクトになっていたことは、まちがいない。

表5 良い体験の内容（複数回答）

	大人（22人）		子ども（27人）	
都会にはない自然の中ですごせたこと	18人	82%	20人	74%
野菜や果物をもらったり収穫させてもらったりしたこと	5人	23%	8人	30%
他の家族と一緒に遊んだり話したりしたこと	18人	82%	19人	70%
他の家族と一緒に食事を作ったり、作業したりしたこと	16人	73%	13人	48%
ログハウスを建てたり、池を作ったりしたこと	9人	41%	5人	19%
その他	2人	9%	4人	15%

C. 「どういう面が良くなかったか？」

この設問は、良い体験ではなかったと答えた人に対して問われたが、良い体験では

なかったと答えた人はいなかったため、これに答えた人は、勘違いした人と思われる。親は、「掃除や食事の準備が忙しすぎた」「睡眠時間が少なく体力的にきつかった」「他の家族と雑魚寝などプライバシーが守られていなかった」にチェックを入れた人が各1人ずつあった。これらはチェックを入れなかった人も多かれ少なかれ感じていたことと思われ、運営上反省すべき点である。子供は、1人が「その他」にチェックを入れ、内容は「自己紹介がなかった」であった。友達の友達で現地で初対面ということも多かったのも、当然の感想であり、配慮すべき点と思われる。

D. 今の自分にどういった影響があったか？

プラスの影響かマイナスの影響かも尋ねたが、マイナスの影響と答えた人はいなかった。親1人と子ども2人が延べ7項目に、プラスとマイナスの真ん中に丸をつけていた。どの項目にプラスと答えたか人数と割合を表6に示す。親子とも、「他の家族や友人との関係にプラスの影響があった」と答えた人が最も多く、親の8割、子どもの7割弱を占めた。子どもにとっては、幼なじみ、親にとっては、同志、またはブラザーフット・シスターフットの間違った感覚だったのではないかと推測される。

表6 今の自分にどういった影響があったか（複数回答）

	大人（22人）		子ども（27人）	
夫婦関係	10人	45%		
親子関係	17人	77%	15人	56%
兄弟姉妹関係	6人	27%	15人	56%
他の家族・友人との関係	18人	82%	18人	67%
自分の趣味・興味	8人	36%	16人	59%
人生観・子育て観	15人	68%	14人	41%
その他			1人	4%

さらに親では、「親子関係」、「人生観・子育て」と続き、自分の子どもだけでなく、他の家族の子どもたちも一緒に、複数の大人が子育てすることで、子どもへの見方が広がったり、自分だけではないのだという連帯感が生まれた可能性がうかがえる。特に父親は、10人中9人が親子関係に良い影響があったと答えており、子育てへの父親の参与にこの体験が有効であったと考えられる。

子どもでは、「親子関係」「兄弟姉妹関係」「自分の趣味・興味」に、6割弱が良い影響があったと答えている。「人生観・子育て観」にも4割がチェックを入れており、予想外の高い比率であった。子どもにとっても他の家族の親子関係や兄弟姉妹関係を目の当たりにすることは、家族観を広げたとはいえない。また、もともと昆虫や生き物に関心の強い子どもが何人かいたが、その子たちと一緒に行動することで、生き物への興味を持ち始めた子も多い。自由記述欄に、裏山へ登ったことが印象に残っていると書いた子も数人おり、山登りへの関心が芽生えたのではないかとと思われる。

E. 「将来子どもができたとき、家族で行きたいか？」

行きたくないと答えた人はいなかったの、「何度でも行きたい」と「一度くらい行ってもよい」の2グループについて、男女別、参加回数別に人数を示したのが、表7である。カイ2乗検定を試みたが、いずれも5%レベルで有意差は認められなかった。子ども全体としては、7割近くが「何度でも行きたい」と答えており、世代を超えて継承される価値のあるものと認識されていることがわかる。

表7 参加回数別将来の参加希望（子ども）

	何度でも 参加したい	1回くらい 参加してもよい
3回以下	6人	4人
4～9回	5人	1人
10回以上	7人	3人
計	18人	8人

5%レベルで有意差なし

F. 自由記述——印象に残っていること

親22人中16人、子ども27人中20人が記述したというのはアンケートとしてはかなりの高率で関心の高さが伺える。親の場合、「夜の大人の団欒」「子どもが寝てからいろんな話ができた」「子育てのストレスを解消できた」など、まず語らいの場として有益であったと言えよう。子育て期の母親が、お酒を飲みながら語り合える場はきわめて少ない。市川（1993）にも述べたが、同性ばかりではなく異性も含めて、夫婦で参加できる場は貴重である。「人生の良き友人を得た」という記述もあった。次に、「家以外での子どもの様子を見れた」「共同作業を通して夫の知らない面が見れた」「実父が仕事で参加できなくても、たくさんのお父さんがいた」というような、家族だけでは経験できないことが体験できたことも印象深かったようである。親や教師以外の人にしかられることも、子どもにとって貴重な体験だったのではないか。

子どもの場合は、「ツクシをとって食べた」「イモリ、カエル、クワガタ、川、月」「栗拾い」など、豊かな自然の記述が目につく。同時に、「子供だけで山に登った」「子どもみんなで遊んだ」というように異年齢の仲間での活動が印象に残っているようである。また「おとうさんたちがログハウスを建てたこと」「普段仕事で忙しかった父の意外な特技が見れたこと」など、親の活動もしっかり見ていたことがわかる。「すべて」「決められへん」「子どもの村で過ごしたこと自体が輝いている」というコメントは、大変うれしかった。

4. ま と め

以上、「子どもの村」の活動の概要と閉村後7年を経て実施されたアンケートの結果を報告した。特記すべきことは、蛇にかまれたり、転んで栗のイガが多数刺さったりというようなアクシデントは数多くあったが、病院へ行かねばならないほどの怪我をした子ども

がひとりもいなかったことであろう。父親が足を滑らせて怪我をし、頭部を3針縫ったのが1件のみである。都会の感覚からすれば危険な場所もあり、家庭では子どもにさせないようなこともしていたことを考慮すると、自分で自分を守る能力を子どもは備えているのだと改めて感心させられる。

「父親も含む育児の共同化」の試みの1例を示したわけであるが、主として母親つながりの場に多くの父親が参加してくれたのは、主たる活動が野外活動で、そこに父親の活躍する場が多くあったことが幸いしていると思われる。川で魚を手づかみで捕らえる方法を教えてくれる人もいたし、夕食のバーベキューはいつも火起こしから父親たちの仕事であった。子どもそっちのけで親が楽しんでいた感もあるが、子どもがいなければできなかった体験であり、子どもが巣立っていく今、懐かしさとともに寂しさも覚える。子どもを通じて親の友人が増えるということは、父親の場合母親ほど多くないと思われるが、「子どもの村」参加者は、男同士の付き合いも広めかつ深めたと思う。

また、母親が、子育てについてのちょっとした悩みを雑談の中で相談できる場があることは、ストレスをためないことにとっても役立つ。改めて相談室を訪ねるほど深刻ではないが気になることが育児にはたくさんあるからである。先輩ママの体験やアドバイスは、専門家の意見とは一味違う安心感をもたらしたのではないだろうか？そして何より、子どもと父親が仲良く何かに取り組んでいる姿を目の当たりにすることが、母親に、一緒に子育てしているのだという連帯感と安心感をもたらしたと考える。

「子どもの村」のような施設を個人で準備することは、一般的ではないかもしれないが、公的、私的な野外活動の場を利用することもできるし、日帰りならもっと気軽に参加できるだろう。中学校区で、地域の協力を得て毎年魚釣り大会を実施しているところもある（伏尾台小学校，2002）。これに参加したことをきっかけに、父子で魚釣りに出かけるようになったといううれしい報告も聞いた。要は、それぞれの地域で、何ができるか、無理をせず息長く続けやすいことから始めることだと思う。

最後に、アンケートについては、人数が少なく調査項目にも不備があったと考える。改善して『楽しく子育て』できる社会づくりの一助となるよう今後も研究、調査していきたい。

<謝辞>

アンケートにご協力くださった皆さん、お忙しい中どうもありがとうございました。

「子どもの村」で一緒に過ごした皆さん、素晴らしい体験をありがとうございました。この場を借りてお礼申し上げます。

<文献>

- 池田政子 2000 夫婦関係とジェンダーギャップ 伊藤裕子編著 『ジェンダーの発達心理学』
p 183～208 ミネルヴァ書房
- 市川緑 1993 「子どもの村」の隠れた効用 「連」出版委員会編 『随筆集 連』 p 12～13

知人社

岩堂美智子 1997 親と子の発達をともに促す「共同」子育て活動の支援および育成 人間性
心理学研究 第15巻第1号 p 24～29

尾形和男 2003 父親の育児と子ども——育児は夫婦関係と父親を変化させる—— 柏木恵子
ら編 『心理学とジェンダー』 p 44～51 有斐閣

柏木恵子 2001 『子どもという価値』 中公新書

厚生省 1998 『平成10年版厚生白書——少子社会を考える』

佐藤一子 2002 『子どもが育つ地域社会』 東京大学出版会

菅原ますみ 1998 父親の育児行動と夫婦関係・子どもの精神的健康 1998年日本発達心理学
会発表資料 『平成10年版厚生白書』による

高橋重郷 2003 少子化時代の出生動向 毎日新聞社人口問題調査会編 『少子高齢社会の未
来学』 p 69～111 論創社

伏尾台小学校 2002 研究紀要「子どもの姿が見えてくる，学びが楽しくなってくる」

八木成和 2002 子育て支援に関する最近の研究動向をめぐって 四天王寺国際仏教大学紀要
人文社会学部第34号 p 291～302

附表1. アンケート用紙

アンケートのお願い

新年、おめでとうございます。皆様いかがお過ごしでしょうか？

近年、少子化に歯止めがかからず、子育て支援の必要性が叫ばれております。かつて、青垣町「子供の村」において、週末の共同子育てを体験された皆さんにあの体験がどのように認識されていたのかお尋ねしたいと思い立ちました。貴重なお休みで、お忙しいかと思いますが、よろしくご協力ください。無記名ですし、ご迷惑がかかることは一切ありません。ご家族一人一人お答えください。

大阪経済大学人間科学部講師 市川 緑

1. 「子供の村」で週末を過ごした体験は、自分にとって良い体験だったと思われるか？
a. とても思う b. 少し思う c. あまり思わない d. まったく思わない
2. 1でa, b, とお答えになった方にお尋ねします。どういう面が良かったと思われますか？ 当てはまるものすべてに○をお付けください。
a. 都会にはない自然の中ですごせたこと
b. 野菜や果物をもらったり、収穫させてもらったりしたこと
c. 他の家族と一緒に遊んだり、話したりしたこと
d. 他の家族と一緒に食事を作ったり、作業したりしたこと
e. ログハウスを建てたり、池を作ったりしたこと
f. その他 ()
3. 1でc, d, とお答えになった方にお尋ねします。どういう面が良くなかったと思われますか？ 当てはまるものすべてに○をお付けください。
a. 掃除や食事の準備が忙しすぎたこと
b. 睡眠時間少なく、体力的にきつかったこと
c. 他の家族と雑魚寝など、プライバシーが守られていなかったこと
d. よそのおじさんおばさんにしかられたこと
e. 子供の村へ来ることで、クラブや友達との交流ができなかったこと
f. その他 ()

4. 「子供の村」で週末を過ごしたことで、今の自分に影響があったと思われることがありますか？ 当てはまるものすべてに○をつけ、プラスの影響かマイナスの影響かもお選びください。
a. 夫婦関係 (プラス・マイナス)
b. 親子関係 (プラス・マイナス)
c. 兄弟姉妹関係 (プラス・マイナス)
d. 他の家族・友人との関係 (プラス・マイナス)
e. 自分の趣味・興味 (プラス・マイナス)
f. 人生観・子育て観 (プラス・マイナス)
g. その他 () (プラス・マイナス)
5. 当時子供だった方にお尋ねします。将来家庭を持ち子供ができたとき、もし「子供の村」のような場所があったら家族で行きたいと思われませんか？
a. 何度でも行きたい b. 1回くらい行ってもよい c. 行きたくない
6. 1番印象に残っているのはどんなことですか？ 自由にお書きください。
7. 最後にあなた様ご自身について教えてください。
「子供の村」に行かれた当時、何歳くらいでしたか？ (歳～ 歳)
(ちなみに「子供の村」は、平成2年5月から平成9年8月まで開いていました)

性別を教えてください (男 ・ 女)
およそ何回くらい行かれましたか？
a. 3回以下 b. 4～9回 c. 10回以上

ご協力、どうもありがとうございました。

お問い合わせは、TEL ***-***-*** 市川まで